

閉会挨拶 埼玉県済生会支部長 原澤茂

皆さん、こんにちは。今日は連休の最初の日、秋晴れの絶好の行楽日和にもかかわらず、多くの市民の皆さん、あるいは関係者の皆さんに集まっていただきまして、第 14 回済生会貧困者支援のシンポジウムをこの春日部で行うことができました。

特に子ども支援フォーラムと銘打って、このフォーラムを開催させていただきました。

私は彩光苑には年に何回か来苑しておりますし、埼玉県の 3 病院と老健、特養、それから 23 の事業をやっておりまして、その責任者をしております。

彩光苑は県から平成 15 年に移管をされて早 30 年ぐらいになるかなと思います。

私も医師になりまして、56 年目になりました。25 年前に済生会川口総合病院に赴任いたしまして御年 82 を迎えております。

先ほど済生会の炭谷理事長がお話になったように、済生会は 113 年の歴史がありますし、皆さんご存じのように、医療と福祉の最大の団体、社会福祉法人です。最近、どここのところでも企業、その他お話しになられているように D&I、ダイバーシティ、インクルージョン、最近それにプラス T という文字を付けますが、済生会も D&I をずっと継続しております。ダイバーシティ、インクルージョン。ソーシャルインクルージョンという方もあるかと思いますが、いまお話になった子どもも含めてダイバーシティ、いろいろな組織、あるいはいろいろな個人が入ってくる。インクルーシブですね。そういった事業、あるいは考え方が一般的です。

今日のシンポジウムは、水谷先生の夜回り見守り隊の非常に生々しいお話から始まって、基調講演が約 1 時間。シーンとして、私もテレビではお伺いしたことがあるんですけど、生で聞くのは初めてだったので非常にのめり込みました。たぶん会場の皆さんもそうだったのではないかと思います。そこで見守られた拓也さんが登壇したということも非常に意義深いシンポジウムではなかったかと思います。

済生会に非常に造詣の深い工藤先生をお迎えし、コーディネーターをしていただきありがとうございました。それから、拓也さんをはじめ、県内の子ども支援の皆さんのご協力で、このシンポジウムが非常に成功裏に終わることができました。これは、私も含め、主催をした彩光苑の田嶋所長と職員の皆さん、済生会川口総合病院の職員もお手伝いしていただきました。その賜物ではなかったかと思って、皆さん方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

時間も限られておりますので、最後にシンポジウムとちょっと別のお話をさせていただきます。医師の立場から、ネグレクトを受けた患者さんを診る側になることが結構あるんですね。これはどういうことかといいますと、今日もお話にありましたように、「三つ子の魂百までも」ということがよく病気の中にあります。どういう病気が多いのかというと、一般の人も結構かかる病気ですが、虐待とかネグレクトを受けて大人になった人、あるいは学生さんも含めて、ある程度年を取った人がよくかかる病気は、体の機能性の障害が起こります。

よくいわれていますが、過敏性腸症候群、聞いたことありませんか。腹痛がありトイレにすぐに行きたくなって、下痢になったり、あるいは便秘になったりする。それから機能性ディスペプシア、機能性の上部の疾患を機能性ディスペプシア、下部、小腸から大腸の過敏性腸症候群。これは消化管の機能異常によって起こるもので、ガンがあったり、潰瘍があったりして起こる病気ではなくて、ストレスが問題です。ストレスを抱えていない人はいないというかもしれませんが、ストレスがかかったときにそういう機能性の異常になる人は、子どものころに虐待とかネグレクトを受けた人。これは拓也君に聞きたいところですが、個人的なことなのでなかなか聞けないですが、簡単にストレスに曝露されるとそういう症状が起こってくる。これは医学的に言っておきたいと思っています。

ストレスなんか受ければみんな病気になるよというかもしれません。ただ、医学的に「三つ子の魂百までも」ではないですが、そういうときに受けたことがある人はかかりやすいといわれていますので、皆さん方も何かのところで片隅でもいいですから、覚えておいていただきたいと思います。

今日は1時から4時まで本当に長時間にわたりまして、基調講演、シンポジウム、有意義に開催できたと思っております。皆さん方も、できればある部分、今日のテーマにあった、子育て、子ども支援というところに焦点を当てて生活していただきたいと思います。本日はご参加どうもありがとうございました。それから演者の皆さん方、ありがとうございました。以上、閉会の挨拶に代えたいと思います。ありがとうございました。(拍手)